

海外出張報告書

2013 年 11 月 28 日提出

氏名	古山若呼
所属	人獣共通感染症リサーチセンター国際疫学部門
学年	博士課程 1 年
出張先	モンゴル ウギヌール湖、周辺の湖
出張期間	2013 年 8 月 29 日 ～ 2013 年 9 月 8 日
目的	モンゴルのカモにおけるインフルエンザウイルス保有状況の調査

活動内容

近年、日本を含むアジア諸国において H5N1 高病原性鳥インフルエンザが多発している。2010 年度の日本における本病の発生は渡り鳥が南下する時期に合わせて増加・拡大し、分離されたウイルス株は 2009-2010 年にモンゴル国において分離された高病原性鳥インフルエンザウイルスと非常に近縁であった。このことから、今後も中国由来の H5N1 高病原性鳥インフルエンザウイルスが野生水禽に導入され他国に拡散する可能性が考えられ、監視を強化する必要がある。インフルエンザウイルスの対策をより有効にするためには自然宿主である野生水禽における調査は欠かすことができない。カモなどの野生水禽は北方圏の湖沼を夏季の営巣地とし、秋に各地へと南下していく。そこで、本疫学調査では、北方圏に近いモンゴルの湖沼を調査地とし、南下を始めた渡り鳥を対象として、鳥インフルエンザウイルス保有状況についてサーベイランスを行った。

本サーベイランスは人獣共通感染症リサーチセンター、国際疫学部門の高田礼人教授、獣医学研究室的岡松正敏助教に同行し、モンゴル国の State Central Veterinary Laboratory (SCVL) 所長の Dr. Ganzorig の協力の元で行った。

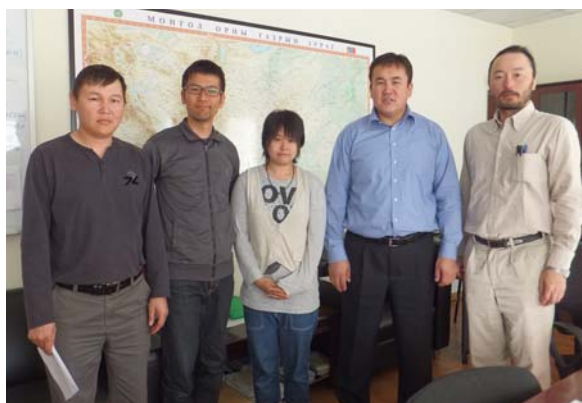


図 1 : SCVL のオフィスにて ; Dr. Ganzorig (右から 2 番目)、高田教授 (右端)、岡松助教 (左から 2 番目)、筆者 (中央)

[研究調査地点、日程]



図 3 : サンプルングを行った Alag zegstei nuur と下痢気味のカモの糞

[研究成果]

集計結果			合計
総サンプル数			813
卵に接種したサンプル数			813
ウイルスの分離されたサンプル数			65
		分離率	8.0%

Influenza virus (58)
H1N1 (5)
H1N3 (2)
H3N1 (5)
H3N5 (1)
H3N8 (25)
H4N1 (3)
H4N5 (1)
H4N6 (9)
H6N1 (4)
H6N2 (1)
H6N5 (1)
H10N3 (1)
H12N5 (1)
Paramyxovirus (7)
APMV-1 (7)

図 4 : 調査結果

右図は分離されたインフルエンザウイルスの亜型

本サーベイランスで得られたサンプル数は、カモ:808、白鳥:2、鶉:3 サンプルの計 813 サンプルであった。そのうち、インフルエンザウイルスが分離されたサンプル数は 58 サンプルであった。この結果から、例年通り様々なインフルエンザウイルスがこれから南下を始める野生水禽で分離された。また、本年度の調査では高病原性鳥インフルエンザウイルスは分離されなかったが、本ウイルスが野生水禽によって周辺諸国に拡散されるのを防ぐためにも、モンゴル国における調査は必要であり、これからも継続する予定である。

今回のモンゴル国における調査は、SCVL 所長の Dr. Ganzorig を始めたくさんの人々の協力を得て実現した。また、現地の人々との交流を通じて、感染症の被害を最小限にするため我々が本調査を継続することがいかに重要であることを再確認した。本調査に協力してくださった皆様や、このような機会を与えてくれた皆様にこの場を借りて感謝致します。



図 5 : 調査メンバー